



二月二十八日、文京区民センターで、第五福竜丸平和協会主催の「三・一ビキニ事件記念集会」が開かれました。

三宅泰雄会長の主催者あいさつの後、八木益男氏(東北大学教授)の「焼津に還った第五福竜丸」、長尾裕氏(放射線医学総合研究所研究室長)の「俊鶴丸と海洋放射能」と題する記念講演が行なわれ、反核アニメ「一〇〇番目のサル」も上映されました。日本原子力研

### 三・一ビキニ事件記念集会開く

研究所、千葉高教組、非核浦和通信、ボランティア・サークル、ほとと・じゅく、の青年など、新しい顔ぶれも多く、約一二〇人が参加しました。

#### 平和行進と広島派遣団

三月一日、再び許すな災の街を、東京大空襲42周年記念の平和行進が第五福竜丸展示館から出発しました。三月十日の東京大空襲の日をむけ、下町の露路から露路を歩み、町角の記念碑を巡るもので、ビキニ事件の日には第五福竜丸から出発するのは今回で三回目。白く「平和」と染め出した赤く燃えるようなハッピを着、横幕には核戦争反対の字が鮮かでした。

三月八日、今年も「広島こども派遣団」先生・子どもたち一四〇人が展示館を見学。学習のあと広島にむかいました。西多摩教組のよびかけたもので、昨年より大きくひろがりました。

#### 平和協合理事会開く

三月二十七日、学士会館で第76回理事会がひらかれ、新年度の事業計画と予算等を決定しました。

### 「草の実」と平和への願い

齊藤鶴子

去る三月七日、国際婦人デーの三月八日を一日くり上げて、核兵器廃絶と軍縮を実現させるために婦人の行動を広げる会、は街頭行動をいたしました。参加している三十六の婦人団体は渋谷のハチ公前に集まり、道玄坂、NHKなど三つの方向に分けてグループをつくり、各戸にビラの配布を、残った人たちは駅をゆききする人に、また広場に集まっている人たちにビラを手渡ししました。

今年には日本国憲法施行四〇周年であること。反核、平和、民主主義のため、四月のいっせい選挙には婦人の一票を有効に行使しようと呼びかけました。また、三分スピーチでは、国際婦人デーについて。各団体の活動や防衛費一割突破、国家秘密法の制定、売上税、マル優廃止による増税は軍拡への道と訴えたのです。草の実会も数名参加協力しました。

話は古くもどりますが、草の実会が私が杉の子会に入会した翌年(一九五五年)朝日新聞の「ひととき」の投稿

者を母胎につくられ戦争体験を通し、また、第五福竜丸のビキニ被災などから反戦、平和に立上った女性の集まりです。

原水爆禁止運動に力を注がれ、最初の原水爆禁止日本協議会の理事長であった安井郁先生がはじめられた杉並教養講座や杉の子読書会が十年で終止符をうたれたことは、私にとって大変残念なことでした。

もし、草の実会がなかったら、その後の私の平和への願いは、唯一人のものでして終っていたかも知れません。憲法を基軸に学ぶこと、考えること、書くこと、そして話し合っって行動していくことという草の実会があったことは私にとって救いだったと思います。心の通う仲間と一緒に平和への願いを声に出し、会員外にも呼びかけることができたことは幸運でした。

四月には統一地方選挙。最近、いろいろの問題にぶつかって、しみじみ思うことは、力を合せ協力することが何よりの力であると思う今日この頃です。

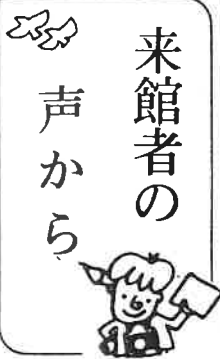
アメリカは核実験を再開し、期待をかけていたソ連も核実験にふみ切りました。

さらに、宇宙への核軍拡であるアメリカのSDI研究への日本の協力の重大さなど暗いニュースを耳にしながら私は、後半生を平和のため俵げられたイギリスの哲学者バートランド・ラッセルの言葉を思い出します。

「戦争が完全になくならなければ人類の運命はきままるのだ、ということをおぼえてはならない。六〇〇〇年の間、人間の生活を支配してきた戦争をなくすということは、けっしてなまやさしいことではない。それは英雄的な仕事であり、全世界の冷静で、分別あるすべての人びとが、全エネルギーを注ぎ、全知識をかたむけてやるだけの価値ある仕事である。このような大きな見通しをつけることはこのように困難な時代に、失意と幻滅に陥ることを防ぐに役立つであろう」と。(市民的不服従について)の講演より(一九六二・四・五)

第五福竜丸は水爆の生証人として水爆のおそろしさを若い人びとに伝えていかねばならず、第五福竜丸平和協会は、原水爆禁止運動が、広く力を合せてゆける基点として大切な存在であると思います。(草の実会・第五福竜丸平和協合理事)

### 来館者の声から



先日、偶然の機会に東京・夢の島にある「第五福竜丸」を見学しました。私は静岡の生まれ、当時中学生だったので事件のことは、おぼろ気ながら知っていただけに初めてその船に接した感懐は一入でした。

実はこの日、東京ガス千葉支社の方のご厚意で豊洲にある「ガスの科学館」の見学に団地の方々とバスで出かけました。「途中で、ぜひこの船を見て下さい」といわれ、第五福竜丸展示館に立寄ったおかげです。「無惨」としか言いようのない姿をみた時、私は胸を締めつけられるようでした。

日々平々凡々と過ごしていましたが、この機会を得て、核実験の事、原発の事、ひいては人類の平和について色々考えさせられ大きな宿題を与えられた様に思います(稲毛団地 岡崎暉子)。

げんばくのようなすを見てびっく

りしました。こわかった。人げんをかえせというしをよんで、父をかえせ、母をかえせ、としよりをかえせ、わたしをかえせ、このしをよんでいてむねがいたくなるような感じがしました。ぜったいせんそうはしないでください。世界の国でぜったいに(小三)。

ただひさん、かわいそう、ざんこく、ひどい、こわいと思う(小三 水久保保真実)。

中曽根首相が、今GNP一割枠突破をしている時、私は第五福竜丸の展示を見て、今こそ国民に核の恐ろしさを訴える時だと思いました。一人でも多くの人々にこの福竜丸の存在を教えます。保存なされた方々の苦勞に感謝します。

話では聞いていたが、新ためて事実を認識させられた。このような時代の中で我々学生も必見のものであると思う。二度とこのようなことを繰り返さないために…(H・M)。



平和随想 (三)

三宅泰雄



ラッセン・アインシュタイン宣言が発表されてから、ただちに各国の科学者たちから、数百通以上の手紙や電報が寄せられ、圧倒的な賛意が表明されました。

しかし、当時は東西冷戦のさなかであり、第一回の「科学と世界問題」会議が、どこで開催できるかは大きい問題でした。ラッセルは、まずインドを第一の候補地と考えました。いうまでもなく、ネール首相が中立、非同盟の政策を堅持し、米・ソ両陣営間で独自の役割をはたしていたからに他なりません。

宣言署名者の一人、イギリスのパウエル(一九五〇年度ノーベル物理学賞)が、ラッセルの意を帯してインドにおもむき、ラッセルの意向をネール首相につたえまし

た。ネール首相は、その提言に並ならぬ好意を示し、一九五七年一月に、第一回会議をインドで開催することを承諾しました。そこで一九五六年のなかばに、ラッセルから各国の科学者に招請状が送られました。ところが思いもかけず、十月に入ってスエズ危機がぼつ発したため、インドでの開催は不適当と判断され、会議は急遽とりやめとなりました。

この困難な状況が打開できたのはカナダ・クリーヴランド市の実業家、サイラス・イートンからの支援によるものでした。イートンは彼の誕生の地、ノヴァ・スコシアのバグウォッシュ(PUGWASH)に、会議を招待したい、と申し出ました。

こうして、ようやく第一回「科学と世界問題」会議がバグウォッシュを舞台に、一九五七年七月七日から四日間にわたって開かれたのでした。それ以来この会議はバグウォッシュ会議とよばれるようになりまし。

第一回会議には二十二人の科学者が集まり、アメリカからは七人、ソ連からは三人参加しました。日本からは湯川秀樹、朝永振一郎、

および小川岩雄(本会評議員)の三氏が出席しました。ここで私たちが忘れてはならないことは、この会議に対し、下中弥三郎氏(当時、平凡社社長)からも、多大の資金援助があったことです。第一回会議の決議は、次のように述べています。

「われわれ全員は、人類は戦争を廃絶せねばならない、でなければ破滅に直面すること、相敵対する列強集団間の抜きさしならぬ状況と、軍備競争を中止すべきこと、また平和維持の確立は全人類にとって、新しい、かつ勝利時代の幕開けであることを確信する。本会議が地道ながらも、これら重大な目的に貢献せんことを熱望する」。

第一回会議のころは冷戦だけなわ、鉄のカリテンは固くとざされ、科学者の間でも、東西間の交流は困難な時期でした。そのころ私はアメリカのカリフォルニア大学・スクリップス海洋研究所で、客員教授をつとめていました。私がおどろいたことは、あらゆる報道機関を通じて、すさまじいまでの反ソ宣伝の洪水でした。たまたま、国際地球観測年(IGY)の打合せのため、ソ連の海洋学者が研究

所を訪れることになりました。そのことを、間借りしていた家の老夫婦にたづねようとしたところ、彼女は、とっさに両耳をかたく押え、身をふるわせながら「おそろしいことだ」と答えました。

このような最悪の状況下で、第一回会議が開けたのは、ラッセルたちの努力と、イートンはじめ、カナダ政府と国民の協力のたまものでした。当時のカナダ首相のデューフェンベーカーは著名な平和主義者でした。彼はその後アメリカの核兵器政策に反対したため、ついに退陣のやむなきにいたりました。

会議では、東西間の相互不理解から議論が紛糾することもあったようです。しかし「戦争廃絶」という最重要の課題で、東西の科学者間の一致がみられたことは、第一回会議の大きい成果でした。

会議では小川博士から、第五福竜丸の遭難や、俊鶴丸による太平洋の放射能汚染の調査結果について報告されたと聞いています。このことは本協会にとっても、忘れられない歴史の一コマであったと思います。

〔投稿〕

悲しい別れ

第五福竜丸元機関長を偲んで

山本忠司さん、十三日前にお逢いした時は蒲郡の病院の待合室にひよこひよこ歩いて出て来て、なあーんだ皆してがん首をそろえて遠くから大変だったなあー、やあやあどうもって、思ったより元気な声で、出迎えて下さったではないですか。今までに同じ様な仲間の見舞いを何度かしているの、かわす言葉に気を使い、選びながら話している私達に、長いこと使った体だもんで検査すりゃあ色々悪いところも出て来るだろう、とこちらを気遣っての返事、俺のことあーいいからお前達自分の体を気を付けなよ、と目の前にせまった死期を自分では、はっきりと意識しながら身のまわりを、きちんと整理し覚悟は出来たと、悟ってしまったかの様に感じとれた。一言の文句も、ぐちも言葉から出て来なかった。

でも私は思う。一昨年仲間でも私に増田裕さんが亡くなった時、ぼつんと山本さんは云った。色々といふぶん悩んだことだろう、誰にも云えないつらい事も沢山あったんだらう、可哀相になあー。小さな声で独り言の様に、つぶやいた言葉が強く印象に残っている。こうした人の心を思いやる山本さんが自分の死を目の前にして何を考えた事でしょう(夜が眠れないと奥さんに云っていたそう)。沢山沢山考えた事でしょう。奥さんに切腹を待たせよう。奥さんが解ると、云ったそう。それなら私は聞きたい。誰が切腹をしると云ったのだ。何んの罪で切腹をしなければならぬのですか? おそらくそんなことも考えた事と思います。でも今となっては何も聞く事も出来ない。仲間も四十代、五十代という

の、一人かけ、二人かけ、だんだん減ってゆく。久保山局長の時もそうだった。川島さんの時もそうだった。増田三太郎さんの時もそうだった。それから鈴木慎三さん、増田裕さん、山本機関長までが、何もおんなじ様に、まねをして肝臓病になることはないよ。やっぱり考えたことはないけどあのアメリカの水爆実験の死の灰のせいではないだろうか。体の奥へしみこんでしまつて、少しずつ少しずつ身も心もむしばんでいっているのではないだろうか。まだ肝硬変の者が何人か、私自身も長いこと慢性肝炎、肝硬変の一手手前、ださうです。見えない死の恐怖につきままとわれた生活が続きます。ビキニ事件は解決済みだそうですが、被爆した者達の体も本当に解決したのでしょうか? 何を云っても、山本さんは、もう返事は、してくれない。常に努力型で勤勉でちょっとせかせかしたところも有ったけど、あんなそわな平和な考えを持った識者だった。定年退職をすぐ目

の前にして、これから自動車の免許を取って苦労かけた奥さんと十年位はあっちこちへ行ったり、やることもまだまだ沢山有るといつていたそうではないですか。つくした苦労も、やっとな、むくわれると楽しみにしていた奥さんもあまりにも可哀相すぎます。おなぐさめの言葉も有りません。本当に残念で残念でなりません。云いつくせなままに、お別れいたさなければなりません。安らかに、安らかにお眠り下さい。

大石又七

(昭和六十二年三月八日)

※元第五福竜丸乗組員山本忠司さん(六十歳)は、三月六日、肝臓障害のため蒲郡市民病院で亡くなりました。

